

# 都留・水みず探検隊

## 賀川一枝さん

今月号では、都留市の賀川一枝さんにお話を伺いました。賀川さんはジャーナリスト、編集者として国内各地の「水と人のかかわり」取材してきた経験を持ち、都留に移住後は「都留・水みず探検隊」をスタートさせ様々な活動をされています。

それでは最初に「都留・水みず探検隊」をスタートさせた動機などについてお聞かせいただけますか。

賀川 私は以前住んでいたところからの交通の便が比較的良いという理由で都留市に越してきました。ですので、ここで「水」とかかわる活動を始めたのは全くの偶然だったのです。

実は、都留に越してきた後の平成25年に山梨で国民文化祭が開催され、その一環で私たち夫婦が「山梨の里水」の部会を任されて、都留の水環境を学ぶことになりました。そこで初めて都留市には富士の湧水があり「水と人のかかわり」に恵まれていることを知りました。ただ、平成の名水百選に選ばれるほどの良質で豊かな水に恵まれているのに、その大切さが少しずつおろそかにされ、生活のゴミなどで川や環境が汚れてきていることにも気づきました。

そんな折、以前取材で出会った東京農工大学の小倉紀男名誉教授から、市民活動から始まった「身近な水環境の全国統一調査」が10年以上続いていることを教えられ、都留市でも実施したいと思うようになりました。私自身はジャーナリストとしてさまざまな市民の声や活動を紹介してきたわけですが、自分がその「当事者」ではなかったことに気づき、自分で活動の一步を踏み出す必要を痛感しました。それで夫の後押しもあって平成25年に「都留・水みず探検隊」を発足させたわけです。

当初は研究機関と連携して活動していたとお伺いしましたが。



賀川一枝さん

賀川 当時、都留市は横浜国立大学との地域包括連携協定というのを進めていました。その中のプロジェクトに「都留の水」の調査とデータ化という項目があったことをきっかけに、私たち「都留・水みず探検隊」の活動も横浜国立大学と連携をしていました。「身近な水環境の全国一斉調査」では、山梨大学の風間ふたば教授からも調査方法のアドバイスを受け、定められた6月の調査だけでなく12月にも行うようにとの、専門的なアドバイスを頂くことができました。また、月1回のワークショップを行いました。市民の関心は決して高くはありませんでした。むしろ「水をきれいにしよう」とか「水や川を汚さないようにしよう」といった呼びかけには反発さえ感じられました。やはり、そういったキャンペーンでは活動も広がらないことを痛感しました。それで、楽しく興味を持てる内容を中心に仲間作りをして、それを通じて良いことを見つけようというやり方に変えていきました。ちょうどその頃には横浜国立大学との提携も解消されたので、「都留・水みず探検隊」独自の活動ができるようになり、幅も広がっていきました。

それではその後の「水みず探検隊」としての独自の活動はどんな内容になったのですか。

賀川 水環境に関わるいろいろな活動を行うようになりました。「水辺の生き物調べ」、「ケヤキ原生林を見に行く山登り+湧水を飲む」、「道草を食べよう」、「水の現場を歩いて、気付いたことを撮影するワークショップ」など、楽しく参加してもらう中で、水環境の大切さを知ってもらうような工夫をしてきました。ただ、都会からの参加者が多いのに

比べて、地域の関心が低いのも事実です。もちろん都留だけでなく、各地の環境活動を見ても同じような限界を感じていました。川のゴミを拾い続けたとしても、ゴミは減らないからです。

捨てる人がいる限り、川はきれいにならないのです。だから、まずゴミを捨てる人を減らさなければならない。それには自分の地域を大切に思う人を増やしていこう。つまり、水環境を変えるには、地域環境を変えることが必要であり、それには同じ思いの仲間を増やすことが大事だと考えるようになりました。

そして「水掛け菜」の活動にもつながっていくのですか。

賀川 はい、たまたま粟井英朗環境文化財団の助成金を助けてもらい、富士山の湧水で作る在来作物「水掛け菜」のイベントを行うことになったのです。水掛け菜は都留、富士吉田、御殿場などの富士の麓をつなぐ作物であること、その育て方や地域独自の食文化を継承すること等々から、富士山湧水のシンボルとしてぴったりな素材だったのです。それで、平成27年の1月に開催した「第1回水掛け菜サミット」では、在来作物としての価値をテーマに「ひょうご在来種保存会」の発起人である山根成人さんと山形大学農学部江頭宏昌さんという在来作物研究の第一人者をお招きしました。また「第2回水掛け菜サミット」では、広く市民の皆さんに参加してもらうために、水掛け菜を使った料理のレシピを試食してもらったコンテスト形式で開催しました。

地元都留はもちろん、御殿場、富士吉田からの6つのグループのレシピのエントリーも得て、試食コンテストでも多くの参加者がおいしい料理を笑顔で楽しみ、投票してくださいました。一歩ずつ、ゆっくりですが、水掛け菜を育てるために大事な水環境への意識が高まるとともに、特産品の水掛け菜が地域の宝となることにつながればいいと考えています。

最近は環境、そして循環型農業などについても活動を広げていると聞いています。

賀川 「水みず探検隊」という名称だと、水に限定したイメージが強いので、「こびっと」という名前の別グループを作ったんです。こびっとでは主に農作物に関連した活動に取り組んでいます。仲間には、家庭菜園のような畑で生産したものを加工品にして活かしたいという思いを持ったメンバーもいます。生活を支えるほどの収入にはならなくとも、仲間と加工方法を考えたり、一緒に作業するのは楽しいことです。そして土や水などの環境に配慮する、循環型農業を行うことは「どう生きるか」という人生哲学にもつながっていくと考えています。28年には都留市に「道の駅」がオープンする計画となっているので、「こびっと」も市民ワーキンググループへの参加を呼びかけ、ワークショップなども開催しているところです。



水掛け菜の収穫

それでは最後に、地域にかかわること、また、何かに取り組むという点において何が大事だと思っていच्छいますか。



炎天下でのフィールドワーク

賀川 今まで多くの人に関わってくれました。ただ、最終的な「当事者意識」を持つ人はそんなに多くはありません。地域の活動にかかわって、それを成功させるには「若者」「馬鹿者」「よそ者」の3つのキーワードが必要だと言われます。当然、誰も「馬鹿者」にはなりたくないもので

す。でも、誰かがその役をやらなければ、物ごとは変わっていかないでしょう。

私はしがらみのない「よそ者」で「馬鹿者」の2つの要素を持っていると思います。そして最近、賛意を示してくれる協力者、仲間が増えてきたので、とてもうれしいのです。結局、賛意を示してくれる協力者、仲間は、さまざまな場面で共通の価値観を持っていないと協働することはできません。ただ同時に、細かい違いは認め合う、そういう思いやりも不可欠です。約3年間の活動で、そのことを学べたのは、私にとって一番の収穫だったかもしれません。

都留の水が、胸を張れるくらいきれいになるには、まだまだ時間がかかるかもしれないけれど、諦めずに活動を続けていきたいと思っています。